

小 櫛

中村嘉津

姉上のつげの小櫛かひいやりと、素足にふれぬ
春の椽側

汽車の中われに隣れるよき人の、櫛の光りに心
おさるゝ

たんぼゝの實ぞふはくゝと風に飛ぶ、悲しや春
も暮れてゆくめり

母あらばこの悲しみを告ぐべきに、若草の野に
來てはわが泣く

夏ちかみ沼べに生ふる青芹の根をひたすまで水
まさりけり

さみごりの一葉くゝに日をうけて、そよめき立
てり初夏の木々

木々の葉のみごりの上にあざやけく、ニコライ
の塔をみるあしたかな

くゝとなく蛙のこえにやゝしばし、青沼のへに
たゝすむ夕

夕ぐれの池に蛙のこゑしげし、明日は雨らし月
のくもれる

水のごと心すみたる君なれば、わが近づくは惜
しかりされど

ゆふべゝ窓によりては聲ひくう、神をたゝへ
て歌うたふ君

つらき事悲しきこともさりげなく、ほゝゑみみ
する君の尊とさ

一日だにわれにもあれや君のごと、尊き心安け
き心

つひにわれ歌に親しむ性ならず、かく思ひつゝ
なほも筆とる

おりつくす所はしらすひたすらに、けはしき坂
をただはしるわれ

黙

中山八千代

ことさらに黙して三年ありしかばそが安らげく
なりて來しかな

われとわが心の窓に戸をさして多くの人は交は
らぬかな

ことさらにもたしてあればよく云ふが私の性と
は人の知らなく

いつはらす眞の我を人みなの前に見せんとおも
ひてあれど

ともすれば憂もなげによく笑ひ我をいつはる心
かなしも

これもまた人の心にさからはぬてだてと我をい
つはりてをり

この日頃われいつはるに馴れにけりかく思ふ時
涙ながるる

つゝましくかざりてをれとともすれば眞の我の
きらめきて出づ

我を知る人に對ひてある心地雑木林にひとりす
われは

もだしたる林の中に我もまたもだしてあれば心
安かり

生ひ出でてそのままそこに伸びて行く木を羨み
ぬ旅にある子は